

ペルー

移住者を取り巻く状況

日本人の計画的南米移住は、1899年(明治32年)にペルー国のサトウキビ耕地へ契約雇用農として入植した790名から始まる。(香川県人の南米移住も、このペルー移民の第二航海者として1903年(明治36年)7月カヤオ港に到着した井上宇一郎ほか43人が最初である。)

もっとも、それ以前にペルーに定住した日本人として、現地名ミゲル・デ・シルバという者がいる。リマ市の橋の改修工事で、5人の中国人と1人の日本人に賃金が未払いになっているという1608年(慶長13年)の記録がある。多分漂流民であろう。また、1844年(弘化元年)、ペルー捕鯨船アナ号が、日本近海で伊助(34歳)ほか3名の漂流民を助けており、彼らはリマで住んでいたらしい新聞記事が残されている。このほかに、マリア・ルース号事件や高橋是清の銀山開発に深くかかわった初代のペルー駐日領事オスカル・ヘーレンに随伴してペルーへ来た伴童、中村万吉は自分の意志で移住した最初の日本人である。中村の子孫はペルーで一番古い日系家族であるとされ、1974年(昭和49年)の時点で六世の時代になっている。

なお、マリア・ルース号事件は、その後の日秘修交仮条約および上記日本人の計画移住に大きく影響したので、概要を付記する。

1872年(明治5年)暴風で破損し、修理のため横浜港に停泊中のペルー船マリア・ルース号から脱出した中国人が、船中で甚だしい虐待を受けているクーリー(苦力)の救済を求めたことから事件が始まる。時の外務卿副島種臣は英米公使らの支援・示唆も受けて大江卓神奈川県令に命じてこの非人道的な事件を、日本の法に基づいて裁判にかけ、船長やポルトガル、フランス、プロシヤの領事の非難を押し切り、ついにはマリア・ルース号のクーリー全員を解放した。

当時、ペルーは黒人奴隷を解放したために沿岸耕地でのサトウキビ栽培の労働力が不足し、ポルトガル領のマカオから中国人を買ったり、騙したりして奴隷船に乗せていた。船内の狭隘、非衛生、食料不足などで、マカオからカヤオまでの百日余の航海中に、少ない時でも9%、多い時は56%の死者が出たという。

マリア・ルース号事件は国際問題にまで発展し、ペルー政府はこの解決のためにガルシア公使を日本に派遣、彼によって1873年(明治6年)8月21日付けで日秘修交通商航海仮条約が締結された。この仮条約があったために、ほぼ同時期に始まった南米への日本人移民交渉は、ペルーの方がブラジルよりも9年早く実現をみたのである。

一方、マリア・ルース号事件は、ロシア皇帝アレクサンドル二世の手にゆだねられ、1874年日本の全面的勝利で初の日本外交は世界の注目を浴びたが、ペルー側は面目を失った恨みを忘れず、その後の日本人移民の交渉を難しくした。

初期のペルー移民

初代駐ペルー
一公使となった
室田義文と森
岡商会の田中
貞吉の努力に
よって初めての
日本人集団移
民が許可にな
った。それは中
国人労働者の

導入が止まり、サトウキビ耕地が労働力不足になったのを補うためであった。応募したのは790人。20歳以上、45歳未満の身体壮健で品行方正であることが条件であったが、ペルーがどこにあるか考えてみたこともない連中で、ただ外国で稼いで小金を貯めて帰ることが唯一の希望であった。



カサ・ブランカの無縁塔

1899年(明治32年)4月3日、第1回移民がカヤオ港に到着した。南北に広々と展開する荒涼とした砂漠と、古ぼけた寺院の尖塔、田舎じみた首都リマのたたずまいに、移民たちはどんな思いをしたであろうか。その後の惨憺たる苦難を知る由もなかった。

各地のサトウキビ耕地に配耕された移民たちは、日本で聞かされたこととあまりにも違う労働条件や生活環境に驚き、2カ月後にはもう日本移民がストライキを起こしたという報がカヤオの森岡商会に届いた。田中は急ぎ耕地へ出向いて調査し、調整を行った。雇用主、移民双方言葉が通じないことから意思の疎通を欠く上に、雇用主側には奴隷制時代の旧習や中国人労働者を使ったころの人種差別感などが残っており、労働賃金や、生活環境の悪さ、栄養不足、続出する病人に対する治療の不足などが移民の不安と不満を募らせていた。

移民の方にも問題はあった。貯蓄するのに急で、非常な粗食に甘んじ、早く帰国したいばかりで士気が地に落ちていたし、不慣れで当初は労働の成果も低く、雇用主にタレア(請負)制を持ち出させた。しかし、タレア制になり、工夫して労働成果を上げてそれを評価せず、賃金を据え置く耕地主の勝手さ、さらにマラリア、チフスなどの風土病による死亡者の増加に、移民たちの脱耕、退耕が増えていった。カサ・ブランカ耕地では入耕後3カ月たつと、病人続出で就労できる者は13%、5~6月中に40名もの死亡者を出したので、士気を失うのも当たり前であった。どの耕地も似たりよったりで、命懸けで夜逃げをし、乏しい水と飢えに悩まされながら、砂漠地帯を歩いてリマへたどり着いた者も多かった。田中は続々とリマに集まる移民のために建物や食料を用意し、次の働き口を見つけるのに奔走した。年少の者は上流家庭に雇ってもらい、屈強な者20人ばかりはアンデス山東のコーヒー園に送ったり、農場を借り受け野菜、果物作りや漁業をさせ自立の道を開かせた。策に窮して91人を国交のないボリビアのゴム採集地へ送り込んだ。これが後日問題となり引き揚げるが、2名が残留しボリビア最初の移民となる。

1900年(明治33年)10月までに、実に124名の元気であった青年たちが死んでいった。

移民の窮状を訴える田中の報告書は外務省に届いたが、これとは別に、田中は頼むに足らずと新潟県人らが出身県知事に救済嘆願書を出し、困難な境遇を取り調べた上で帰国できるよう手配を嘆願した。外務省はしばらく形勢を観測していたが、移民からペルー人にカヤオの移民宿舎が襲撃されたので帰国を嘆願するという書類が届くに及んで、驚いた外務省はメキシコ公使館の野田良治諸規制を派遣した。移民の窮状は想像外であった。万策尽きて帰国してしまった田中の後を受けて、野田は紛争中の各耕地を巡り、騒ぐ移民を鎮め、耕主とも談判して歩いたが、もはや策の施しようがないことに気が付き、本省に移民全体を帰国させた方が森岡にとってよいと報告した。しかし、移民には気の毒な事態だが耕地での騒ぎは得策ではないし、帰国も容易ではないから一ついて働くより方法がないと説

き、耕主側には条件の改善を要求した。野田の説得に移民側も少なからず反省し、野田のスペイン語が役立って雇用主側の待遇も幾分か改善された。

こうして移民も気候風土に慣れ、死亡率も低くなり、野田は「事態は小康状態になったが、当面は緊急措置として医者派遣を」と報告書を送って数名の医者の派遣を実現した。

移民たちはこうした惨状にあって堪え忍び黙々と働き、乏しい収入の中から貯蓄に励むものも少なくなかった。

1900年(明治33年)2月現在で、森岡商会に託して故郷に送金した者は237人、総額962円に達した。1年未満の期間にそれだけの成果を挙げたのである。

その後も移民は続き、1939年(昭和14年)8月到着の平洋丸の移民を最後にペルー移民は終わった。第二次世界大戦中は主だった日本人は敵性国民として北米に抑留され、ペルーに残った者も多く苦難を味わった。その間に排日運動の洗礼も浴びたが、戦後は再び確固たる経済基盤を築き、ペルー国民としての今日の繁栄をもたらしている。

香川県人の南米移住は、日本人のペルー移住が始まってから4年後の1903年(明治36年)、第二航海者としてカヤオ港に到着、サン・ハシントに入植した井上宇一郎ら44人が最初である。「在ペルー邦人75年の歩み」によれば、第一航海の移民団が4カ年の契約期間満了となるので迎えの船を送らねばならないが、往路が空船では損失がかさむこと、および第一航海の移民も3年を経過すると大分落ち着き前途に希望が持てるようになったことや、最も多く入耕したカニエテ耕地では雇用主が日本移民の能力を認め、ペルー人や黒人労働者を解雇してまで日本移民を希望してきたことが森岡商会の事業欲を動かし、第二次移民募集に踏み切らせたのである。



リマ 日秘文化館内 日本人移住史博物館

第一回では家族移民がなく、いろいろな面で具合が悪く落ち着かないので、第二回からは家族移民をいれた。しかし、香川県からの移民に女性が加わったのは1909年(明治42年)第9航海の稲垣ツネと稲垣アサの夫婦からである。

サン・ハシント耕地も衛生環境は悪く多くの移民が死亡したという。香川県からの第3回移民13人以降はカニエテに配耕されることが多かった。

1903年(明治36年)以来18年間、14回にわたりペルーに渡った本県からの雇用契約移民は174人になり、そのうち3人が女性であった。ただし、自由移民は含まれていないので、総計何人の県人移民がいたのか、そしてこの内何人が帰国したのか今のところ不明である。